

「ダムと民の五十年抗争」の著者と大滝ダムへバスツアー大成功

奈良情報公開を進める会は6月7日、情報公開制度を活用する一方で地元住民への粘り強い聞き取りによって書かれた『ダムと民の五十年抗争—紀ノ川源流村取材記』(風媒社)の著者、浅野詠子さんを案内役に、著書の舞台である奈良県吉野郡川上村の大滝ダムへのバスツアーを行った。近畿各地でダム問題に取り組む市民など小型バスの定員いっぱい25人が参加した。

浅野さんの講演会を1月27日に開いた後、「ぜひ現地に行ってみたい」という声に応えるための日帰りツアー。JR王寺駅と近鉄大和八木駅から南下し、大滝ダム管理事務所長のレク付きで同ダムを見学した後、試験湛水中に地滑りが発生し、37世帯全員が仮設住宅での生活を迫られた後に離散せざるを得なかった白屋集落跡などをめぐった。参加者からは「現場を見ることができた。こういう企画をまたしてほしい」といった声があった。

浅野さんは、国交省側から、総事業費3640億円のダム工事関係や、全部で500世帯余りに上った住民の立ち退きへの補償問題に関する書類の多くが「保存期間10年」「不存在」とされたり、「黒塗り」の文書しか出されなかつたりの「情報隠し」に遭ったが、空白部分を聞き取りで補い、「住民不在のダム行政」という真実を発掘した。



大滝ダムの問題点と白屋集落の結末を説明する浅野詠子さん(右から2人目)